
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 92

January 2014

2013年度大会が閉幕



(写真は 2013 年度大会一日目共通論題 1 の模様 / 写真提供：吉田 浩)

【2013 年度総会について】

池田嘉郎（事務局長）

2013 年 10 月 11 日現在の会員数は 253 名（うち休会者 9 名）でした。規約第 4 条では、会員総数の 5 分の 1 の出席で総会が成立すると定めており、「休会制度内規」第 4 項に従って会員数から休会者数を除くと、定足数は 49 名となります。総会開会時の出席者は 50 名、この他に 47 名の委任があったので合計して定足数を超えました。

冒頭で議長に吉田浩氏を選出し、続いて豊川浩一委員長が 2012/13 年度の活動報告を行ないました。今年度例会は 7 回開催され、ニューズレターが 3 号刊行されました（90/91 合併号は 1 号分と考える）。雑誌『ロシア史研究』は 91 号が 2012 年 12 月、92 号が 2013 年 5 月に刊行されました。会計報告は松村岳志氏が行ない、会計幹事の土肥恒之・鈴木健夫氏による監査報告とあわせて承認を受けました。

今年度は選挙の年でした。新委員 11 名が選出され、さらに会計監事として鈴木健夫（継続）、富田武の 2 名が選ばれました。新委員会（4 名が補充され、都合 15 名）の構成については 10～11 頁をご参照下さい。また、ICCEES2015 年大会の組織委員会に、青島陽子と池田嘉郎の 2 名をロシア史研究会の代表として派遣することが承認されました。

【2012/13 年度ロシア史研究会会計報告（2012.9.1～2013.8.31）】 [単位は円]

■前年度繰越

ゆうちょ銀行定期貯金	4,000,000
ゆうちょ銀行普通預金	2,000,787
ゆうちょ銀行振替口座	1,680,044
みずほ銀行普通預金	1,175,766
現金	54,004

合計 8,910,601

■2012/13 年度収支

収入	一般会員会費	1,324,000
	雑誌会員会費	107,200
	雑誌売上	84,260
	情報システム研究所	159,711
	広告収入	90,000
	ゆうちょ銀行利子	450
	みずほ銀行利子	123
	合計	1,765,744

支出	NL関連	261,944
	雑誌印刷・発送	736,359
	名簿関連	64,155
	例会関連	6,470
	会計関連	28,004
	事務局関連	32,130
	ロシア史研究案内関連	1,014,800
	各種会費	30,420
	大会関連費	64,388

合計 2,238,706

■大会関連費（11/12 年度） -64,388 の赤字

収入	非会員参加費	0
	懇親会費	298,000
	祝金（日ソ）	10,000
	祝金（ナウカ・ジャパン）	10,000
	2011 年に青山学院で 開催された大会に対する 青山学院女子短期大学からの 補助金	40,000
	合計	418,000

支出	アルバイト代	48,000
	B 会員委員宿泊費	37,620
	食事代	11,550
	書類郵送費	2,010
	大会会場での飲料	1,423
	会場代（清掃費）	14,175
	垂れ幕・地図作製	8,000
	移動費用	1,970
	四学会合同大会 参加費用	16,080
	会場使用料金	91,560
	懇親会費用	250,000

合計 482,388

■次年度繰越（2013.8.31）

ゆうちょ銀行定期貯金	4,000,000
ゆうちょ銀行普通預金	1,602,098
ゆうちょ銀行振替口座	2,283,904
みずほ銀行普通預金	449,260
現金	102,377

合計 8,437,639

前年度繰越+収入=支出+次年度繰越=¥10,676,345

2012/2013 年度の収支（次年度繰越-前年度繰越）¥472,962 の赤字

*2012/2013 年度一般会員請求額 ¥1,549,000、納入額¥1,324,000(納入率 85.5%)

A 会員 125 名（¥8000）、うち家族割引 0 名（¥4000）、委員割引 11 名（¥3000）、休会 3 名
B 会員 127 名（¥4000）、うち家族割引 4 名（¥2000）、委員割引 2 名（¥0）、休会 6 名

本頁は、一般公開のために編集されました（2018年10月13日）。
会計監査委員による監査の結果、問題ないことが承認されたことが掲載されています。また、会計監査報告原本は、事務局に保管されています。



(写真は大会二日目パネルの様 写真提供：吉田 浩)

【大会参加記】

竹村寧乃（北海道大学文学研究科）

2013年度の大会は、10月12日（土）・13日（日）の二日にわたって開催された。筆者は、12日午前の自由論題（中嶋毅報告・麻田雅文報告）および午後の共通論題（半谷史郎報告・吉村貴之報告）に参加した。以下、その様子と感想を記したい。

中嶋報告は、「カスペ事件をめぐる在哈ロシア人社会と日本 1933-1937」と題して、1933年8月にハルビンで発生した仏国籍ユダヤ人の誘拐・殺害事件をとりあげた。報告では、当時のハルビンにおける反ユダヤ主義的風潮や1932年3月満州国成立後の治安の悪化と在哈警察組織の混乱、被害者の父であるユダヤ人富豪の財産所有権といった問題を背景に、犯罪を実行した白系ロシア人ファシスト集団、内外のユダヤ人コミュニティ、仏領事館や日本軍部等の関与を経て、営利目的の誘拐事件が政治的性格を帯びていく過程を示した。質疑においても、とくに1934年末に関東軍ハルビンスペル機関が対ソ戦略として白系ロシア人を利用するために実行犯の救済を必要としたこと、ハルビン憲兵隊の通訳がこの事件に深く関与していたこと等が注目を集めた。

麻田報告「キッシンジャー史観を超えて—米ソ関係から読み解く中ソ国境紛争、1969年—」は、1969年3月の中ソ国境紛争について、先行研究の蓄積がある中ソ関係・米中関係ではなく、1972年ニクソン訪中に先立つデタント期の米ソ関係に焦点をあてて論じた。ニクソンとキッシンジャーは、紛争当初表向きは中立を表明しつつも、ソ連側の核攻撃の可能性を警戒して中国に接近していた。質疑では、ロシアでの近年の研究動向、「核攻撃」の具体的内容や本報告と「キッシンジャー史観」との相違点等が問われた。

共通論題「非ロシア人地域から見たソ連」では、まず、半谷報告「ソ連の民族政策における大祖国戦争の重み—1970年代のソ連ドイツ人の投書を分析する」が行なわれた。報告では、大祖国戦争戦勝30周年を控えた1974年、ソ連ドイツ人が対独戦勝利への貢献を顕彰する記章の追加授与を求めていたことを紹介し、土着性・領土自治に並ぶソ連民族政策の原理として「ソヴィエト愛国主義」の影響を指摘した。続く吉村報告「アルメニア「祖国帰還」運動の諸相—冷戦成立期の国際移動と少数民族」は、帰還運動の背景として、第二次大戦末期、海峡・領土問題をめぐりソ連・トルコ間関係が悪化し、従来反ソ派であったダシュナク党が反トルコ主義を通してソヴィエト・アルメニアに接近したこと、また、アルメニア共産党が在外同朋を意識して虐殺50周年追悼集会の開催を利用したため結果として制御が困難な反トルコ・ナショナリズムを出現させたことを示した。その後の質疑では、二人の討論者が、T. マーチンやF. ハーシュらによる近年のソ連民族政策・ソ連帝国論の解釈や、ソ連における各事例の位置付けを示したが、フロアからは報告それぞれに対する個別の質問が目立った。半谷報告・吉村報告ともに興味深かったが、各民族あるいは各地域に固有の背景・特徴と各時代のソ連内外の状況を勘案したうえで、ソ連全体について論じるには時間が充分でない（あるいはテーマがやや大きすぎる）という印象をもった。また、共通論題と翌13日（日）午前のパネル「ソヴィエト的公衆・公論・公共性—общественность 概念をてがかりに」との関連性を考えるうえでも、予定されていた須田将報告がやむをえず中止となったことは残念だった。とはいえ、筆者自身、両報告および議論の内容からよい刺激を受けた。この共通論題を「今後も多民族国家ソ連について大会で議論を重ねていくための、きっかけ」にしたいという企画の意図に、今後どのように応えていけるか考えていきたい。

【大会2日目に参加して】

田中 良英（宮城教育大学）

参加記としては大変に変則的ながら、以下は筆者が傍聴した大会2日目に限定した内容となる。1日目に公務が重なった関係で、実のところ大会の参加自体についても直前まで悩んだものの、それでも参加を決意したのは、ロマノフ朝支配の300年を対象とした午後の共通論題の魅力にやはり抗し得なかった点大きい。

ところで午前のパネルは、通訳の全くつかない状況で外国語のみにより報告・討論が行われた。こうした進行方式は、私の記憶する限り、大会では初めてではなかったと思われる（ちなみに午後の池田コメントがとり上げた1984年の大会では、外川継男先生が大会印象記を担当されており、偶然ながらその冒頭で、国際シンポジウムに合わせたセッション運営の是非に関し論じられている）。その努力と斬新さを認めつつ、こうした方式が本来の目的とするディスカッションの活発化にまで結びついていたかと言うと、一概には首肯し得ない。それが事前ペーパーの遅れによるのか、報告に傾斜した時間配分によるのか、それとも私を含め英語運用能力の問題によるのか、いろいろと考えられよう。今回の試みを言わば実験として、今後英語討論が主流になるかどうかは、これらの問題の克服にも依拠するように感じられる。

内容を踏まえての個人的な疑問としては、報告者3名が各時期のソ連社会の自律性（あるいはその可能性）を提示し、また以前にロシア史研でお招きしたズブコーヴァ女史が強調したように、とりわけ第二次大戦期に政治体制から独立した社会的活力が顕在化したのだとすれば、それが戦後急速に主導性を失うように見えるのはなぜか、という点がある。もし英語に堪能であれば、この点については質問してみたかった。

午後の共通論題は、（私にとっては）幸いなことに日本語で運営されたため、僭越ながら個人的にも質問のチャンスがあったのはありがたかった。内容としては、池本コメント、土肥・竹中・巽の各報告がアレクサンドル1世、ニコライ1世、アレクサンドル3世、ニコライ2世の治世を主要な対象とする形で並んでいた点が印象深い。無論これは、論者各人の専門領域・関心に引きつけて各報告が準備されたことによるのだろうが、その一方で、こうした19世紀以降への傾斜が偶然の産物なのか、この点は改めて検討に値する問題であるようにも思われた。というのも、私自身、大会の準備段階で委員会から、18世紀の状況に関する質問を受け、19世紀との対照性に思いを馳せた経緯があったからである。「ロマノフ朝100周年」にあたる1713年、これこそ全く偶然の一致ながら、200周年の1813年と同様にロシアは戦時中であった。ピョートル1世の行動記録からうかがう限り、バルト海沿岸地域を転戦していた彼には記念式典を行う余裕など到底なかったようである。しかし、果たして平時であれば何らかの儀礼が行われたのか。この点は、池本コメントが祖国戦争に関して指摘したように、19世紀初頭においてさえも、ミハイル・ロマノフではなくミーニンとポジャルスキーの活躍が偉業として利用された構図を考慮すると、かなり疑わしい。全てを網羅したわけではないので断言できないものの、ピョートルの諸法令においても、過去のロシア君主の事績が根拠に挙げられることはあれ、ロマノフ家のツァーリ達が特別に讃えられ、彼らとの血統的な連続性が権威強化の目的で強調された例は乏しかったように思われる。例えば、18世紀ロシア君主の正統性に対する血統の要素の副次性については、1999年のウィッター報告も言及したところである。

こうした点からは、強大な君主権力が特徴とされてきたロシア国家において、少なくともロマノフという「王家」それ自体が権威の源泉として機能し得たのが、実際には極めて遅い時期になってからではなかったか、との疑問も生じてくる。その意味では、ロシア皇室が一定の人数を揃え、王家としての安定性と連続性を実現する上で、（意図的な結果かどうかは別として）パーヴェル1世の治世が帝位継承法の制定を含め、ロシア社会に及ぼした影響は実に大きかったようにも感じられる。あるいは19世紀以降になっても、ロマノフ家の家格や血統がロシア皇帝の権威や国家の統合に直接に果たした役割が、必ずしも大きなものではなかった可能性は考えられないだろうか。もしそうであれば、巽報告がとり上げた即位アルバム公刊の活発化に象徴される、ニコライ2世の王朝回顧の態度も、単にアナクロというだけでなく、むしろ従来の皇帝達とは根本から異質だったとの評価も下せるかもしれない（この点では、アルバム購入者の意識なども気になるところである）。

以上は何か具体的な論証に基づく仮説というわけではなく、あくまで共通論題を契機として、勝手に思いを巡らした憶測にすぎない。ただ、たとえ不明瞭なものにせよ、このように「考えるヒント」を与えてもらったという一事だけで、大会はやはり私にとって貴重な場であるし、今後ともそうあり続けて欲しいと願っている。



（写真は大会二日目共通論題2の様 写真提供：吉田 浩）

【大会参加記】

吉田 浩(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

ロシア史研究会 2013 年度大会は、10 月 12、13 の両日、明治大学駿河台キャンパスでおこなわれた。報告とパネルは全部で 7 つと決して多くはないが、例年通りヴァラエティーに富んだテーマが新しいアプローチにより扱われていたので知的に大いに刺激を受けた。個々の報告の詳細についてはロシア史研のサイトにあるペーパーをご覧くださいことにして、ここでは報告を聞いて感じ、考えたことを記したい。

初日の午前中は中嶋報告「カスペ事件をめぐる在哈ロシア人社会と日本 1933-1937」とパークバンク報告「Supervising the supervisors: The zemskie nachal'niki of Kazan province at the start of the 20th century」を聞いた。前者は満州国建国直後にハルビンで起こった営利誘拐事件が様々な要因が影響しあって政治的性格を帯びることになった経過を説明したもの。関係者は被害者のフランス国籍ロシア系ユダヤ人をはじめ、ロシア人ファシスト、イタリア人諜報員、フランス領事館探偵、そして日本人と様々で、当時のハルビンの国際性が自ずと浮かび上がってくる点も興味深かった。氏のここ数年にわたるハルビン研究の蓄積に基づく報告だけに、現地日本当局の関与を直接示す史料はないが、憲兵隊と特務機関が関与した疑いが濃厚であるという結論は説得的であった。後者はゼムスキー・ナチャリニクの活動について、カザン県に関する詳細な監査報告を資料として分析したもの。ゼムスキー・ナチャリニクについてはいままで恣意性や非効率性が語られていたが、実際には期待されていた仕事をこなし、行政官僚として優秀な者も数多くいたという結論であるが、従来言われてきた言説との整合性はどうなるのか、監査報告そのものについての史料批判をもっと掘り下げて欲しかった。というわけで、直接の資料はないが外堀を埋めることでわかることがある一方、資料は豊富だがその内容をそのままを事実とできない可能性も生じうる、という歴史研究の根本問題について 2 報告からあらためて考えさせられた。

初日午後の共通論題(1)「非ロシア人地域から見たソ連」は、ソ連の民族政策を領域自治と土着性の原理から分析したもので、非ロシア人を軸足にすえた新しいアプローチであった。半谷報告「ソ連の民族政策における大祖国戦争の重み」は、ソ連のドイツ人が民族的危機感を覚える一方で、「ソ連人」というところに自らのアイデンティティーを求めたという動きを新聞の投書を分析することで明らかにしたものだが、多様なソヴィエト・ドイツ人像があることを氏の論文で学んだ者としては、今回の報告はソヴィエト・イデオロギーに反発する側面への目配りがやや薄く、議論がやや単純化されているように感じた。吉村報告「アルメニア『祖国帰還』運動の諸相」は、アルメニア政府による国外のアルメニア人帰還事業を扱うスケールの大きな内容であった。事業は民族主義を親ソ的世論に転化させる試みの一貫であったが、結果として反トルコ・ナショナリズムに行きついてしまうという副産物を伴ったとのことで、ソ連における民族問題の難しさを考えさせられた。2 日目午前のパネル「ソヴィエト的公衆・公論・公共性—общественность 概念をてがかりに」はソ連国家と個人の間介在する общественность を国民統合の視点から分析した政治文化史アプローチであったが、扱う対象は象徴、言説、表象と現実のギャップなど難しく、正直歯が立たなかった。

2 日目午後の共通論題(2)「歴史のなかのロマノフ朝再考」はロマノフ朝 400 周年を記念したセッションでいわば伝統的テーマであるが、新しい問題の提起という意味で興味深かった。土肥報告「皇太子アレクセイ事件」は氏が得意とする史学史的考察で、論点が整理されとてもわかりやすかった。竹中報告「アレクサンドル 3 世とその時代」は待望の研究であり、個人的にとっても興味深かった。アレクサンドル 3 世は前後の皇帝とくらべると比較的注目されず、どちらかといえばその「反改革」に焦点があてられ否定的評価がされてきたが、前帝の暗殺という危機を乗り越え近代ロシアの安定的発展をめざした時代と考えることもできる。巽報告「18-19 世紀ロシアの戴冠式アルバム」は儀礼を用いた臣民統合という近年の研究史の流れに沿った問題を扱い、図像資料をふんだんに用いたものだったが、権力側の意図がどのように受容されたかについてはまだ今後の課題として残されているように思えた。

最後にひとこと。学会や研究会は特に若手の研究者にとり発表の機会が与えられる場として重要であり、ロシア史研究会もその役割を果たしてきたが、大学を退職した世代にも遠慮せず積極的に報告していただくという方針を出したらいかがであろうか。このように提案するのは、彼らの多くが学者としてはまだ現役でありその知的活動を研究会の財産にしないのはもったいない

と考えるからであり、質問者として立ち、報告者のテーマに関係ないことについて自説を長々と演説する方を近年しばしば見かけるから、ではありません。

【11月例会報告】

小森 宏美

2013年11月16日に開催された11月例会（於早稲田大学）において、松寄英也氏より、「沿ドニエストルにおけるモルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国の『継承』——労働集団合同評議会の自治共和国から連邦国家創設への転換を中心に——」と題する報告が行われた。

報告は、松寄氏が昨年度提出した修士論文の一部に基づき、1988年から1992年3月までの時期に関し、労働集団合同評議会（以下、評議会）と沿ドニエストル共和国創設の関係について詳細に分析を行ったものである。氏の議論の概略は次のとおりである。すなわち、国有企業法に基づき設立された評議会が、1989年の言語法をめぐる対立の中で自治共和国形成／復活を主導する立場に立ち、さらにモルドヴァのソ連離脱の可能性の浮上と新連邦条約締結に向かうソ連全体の動きとのかかわりの中で、キシニョフ政府と沿ドニエストル地域が対等な立場で参加する連邦国家の創設へと評議会の立場が転換した。この連邦国家創設案はモルドヴァのソ連離脱を防ぎ、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国の維持を意図したものであったが、1991年12月のソ連邦解体により、キシニョフ政府と沿ドニエストル地域の立場の相違がますます鮮明になり、紛争を経て、後者がモルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国の継承者となった。

松寄氏の研究は、従来あまり注目されてこなかった評議会の主張や立場の変化を丁寧に跡付けることで、沿ドニエストル地域が「事実上の国家」となるにいたった理由および過程を、紛争勃発前の政治過程に焦点を当てることで実証的に明らかにしたことに特徴がある。質疑応答の口火を切った塩川氏により、この分野では、少なくとも日本では先駆的なものであると評価されたのもそれゆえである。とはいえ、今後の課題とすべき点も数多く指摘された。ここでは、その中でもとくに2つの点を取り上げて紹介しておきたい。

第一は史料の問題である。松寄氏の研究では、当時の新聞など同時代的史料も利用されているが、それでも二次文献に依存している割合が少なくない。そうした二次文献はいかに「客観的に」書かれているように見えようとも、「今から振り返ってみれば」という立場で書かれていることは否定できないし、意図的かそうでないかは別として、記述に誤り（誤解）がある可能性は排除できない。今回の報告では、モロトフ＝リッペントロップ条約の歴史的評価をめぐる動きなどについてそれが指摘された。しかし、同時代的史料にあたってもすべてが明らかになるわけではないことは言うまでもない。そこに書かれていないことの意味合いをいかに解釈するのかという問いはとても重いと感じられた。

第二は集団内／間の多様性の問題である。沿ドニエストル地域については、通俗的には「ロシア人問題」として扱われることも多かったが、実際には、1989年当時の同地域居住者の中で最大の民族集団はルーマニア人／モルドヴァ人であった（続いて、ロシア人、ウクライナ人）。また、民族的属性だけでなく、居住地や職業等の違いは立場の違いに反映されなかったのか。こうした多様性にいかに迫っていくのか、残された課題は小さくない。

最後に、本例会は多くの参加者を得て、質疑応答もここで紹介しきれないほど活発で、示唆に富むものであったことを記しておく。

（写真は11月例会の様
巽 由樹子 撮影）



【12月例会報告】「ソ連解体後の中央ユーラシアの歴史学」(12月15日(日)早稲田大学)
長縄 宣博

今回の例会は、NIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点中央ユーラシア研究会との共催で、ヴォルガ・ウラル地域とウズベキスタンの代表的な歴史家を招き、過去20年間にそれぞれの地域で生じた歴史学の変化と課題について議論した。まず、マルシル・ファルフシャトフ氏(ロシア科学アカデミー・ウファ学術センター歴史・言語・文学研究所)がバシコルトスタンとタタルスタンの歴史学の基本的な流れを整理し、続いてアフタンディル・エルキノフ氏(タシュケント国立東洋学大学/スラブ研究センター研究員)が「独立期ウズベキスタンの歴史研究と文化史研究の軌跡」と題する報告を行なった。内容は、具体的な研究課題の変遷だけでなく、歴史研究を取り巻く制度上の変化も含むものだった。もちろん二つの地域はソ連という同じ経験を経ているので、変化にも共通点が多い。以下ではそうした論点に沿って、当日の議論を振り返ってみたい。

まず、ソ連時代からの連続性として民族起源論が取り上げられた。もちろん一方で、歴史学の全般的な傾向として、多様な意見が表明できるようになり、イデオロギーに束縛されずに各共和国の民族史が古代から現在まで書けるようになったことは大きな成果である。近年それらを集成する通史の刊行が各地で相次いでいるのは偶然ではない。他方で、新しい史料を発掘する郷土史家の増加は歓迎すべき傾向ではあるものの、職業的な歴史家だけでなく愛好家的な人々が研究の蓄積を踏まえることなく、民族の古さと偉大さを誇張する「歴史の神話化」に加わる事態が続いているようだ。

豊川浩一氏の問題提起で、ロシアへの併合に関するこんにちの評価も報告者から解説があった。バシキリアの場合、イヴァン雷帝との契約に基づく「自発的な併合」という解釈が優勢であり、17-18世紀のバシキール人の反乱もこの契約をロシア国家が無視したことに起因すると説明されているという。ファルフシャトフ氏は、一義的に自発性を強調するのではなく、当時の部族ごとに異なる対応の在り方を分析する必要があると述べた。ウズベキスタンの場合、帝政期は「植民地主義の時代」とされ、ソ連時代についてもロシア人と共産党員が悪いという評価に流れやすいようだ。とはいえ、歴史学研究所副所長シュフラト・ムハメドフが帝政期トルキスタンのイスラーム政策について論じた近著で、支配者としてのロシア人内部にあった立場の多様性を認める記述をしており、エルキノフ氏によれば、これは新しい変化の兆しとして評価できるという。

ソ連解体後、従来の民族解放運動史や革命史は「国民国家形成史」として研究されるようになったが、歴史上の人物を「民族の英雄」として顕彰することは深刻な矛盾を伴う行為でもある。例えば、バシキールの傑出した活動家であるゼキ・ヴァリドフ(トガン)についても、全集や包括的な史料集のようなものは刊行されていない。宇山智彦氏がトガンの再評価を妨げている要因は何かと質問したのに対して、自身も新史料を発掘してきたファルフシャトフ氏は、ヴァリドフがバシキール民族運動を率いたのは彼の人生の数年にすぎず、新しい研究によってその他の時期が解明されると、理想的なヴァリドフ像が損なわれてしまうことを共和国当局は恐れているのだと回答した。また、連邦中央にしても、ヴァリドフとナチス・ドイツとの関係など、大祖国戦争の神聖化と矛盾する事実は容認できないという。

過去20年間で新しい研究領域として著しく進展したのはイスラームである。今までのところ、バシコルトスタンとタタルスタンの歴史家は、主にロシア語のアーカイヴ資料に依拠しながら帝政期の国家とムスリム社会との相互関係を再構築することに集中してきた。とはいえ最近では、数は少ないものの、国内外でイスラーム諸学を修めた者が地域のムスリム史料を内在的に読み解く作業に参入しつつある。ウズベキスタンでは、ソ連時代に形成された歴史学研究所と東洋学研究所との分業体制が基本的には継承されている。前者は国家機関が蓄積してきたアーカイヴ資料を、後者はペルシア語、テュルク語、アラビア語の手稿を研究の軸に据えている。本来、この二つが合わさってウズベキスタンの歴史が書かれるべきであるが、近年ようやく、エルキノフ氏自身のようにドイツなどで勉強した新しい世代が複数の言語を駆使した研究を行なっている。

依然として民族共和国を単位に研究が蓄積されている現状に対して小松久男氏は、地域を横断する歴史を書く試みはあるのか、地域史を世界史に位置づけられないか、そしてこれらの目的のために共同研究は可能かと問いかけたが、それはこんにちの中央ユーラシアの諸地域が抱える研究制度上の課題を浮き彫りにした。まず、「民族史」を担う研究・教育機関や政府の理念に合致

しない研究は組織しにくい。また、ソ連の解体は共和国を越えた研究者の交流や文献の入手を著しく困難にし、地域史の再構築に必要なアーカイヴの調査さえままならなくなった。例えば、カザフ草原・トルキスタンの研究には、ペテルブルグとモスクワだけでなくオレンブルグでの調査も不可欠だが、調査に必要な資金の調達は極めて困難だという。広域的な問題を発見する方法論の面でも、現実的な研究の組織面でも、外国の研究者との協力が不可欠なようだ。

最後にファルフシャトフ氏からの問題提起で、国家権力による歴史記述の統制の程度について日露の現状が比較された。氏によれば、近年ロシアでは、統一的な国史の教科書の導入が計画され、「国民の記憶 (natsional'naia pamiat')」に反する言論活動が刑事犯に仕立て上げられる危険性が出てきているという。日本には複数の教科書が存在するが、検定によって内容の差異が目立たないようにしている。近年、検定の指標が「右傾化」しているとすれば、問題は決して他人事ではない。



(写真は12月例会の様様 豊川 浩一 撮影)

【新会員の紹介】

2013年9月から12月の新入会員（5名、入会日順）をお知らせします。

須佐 多恵（2013年9月25日入会）

所属：大阪大学ロシア語非常勤講師

専攻：カレリアの文化と歴史

徳重 豊（2013年10月8日入会）

所属：明治大学大学院文学研究科

専攻：ロシア近代史、ロシア社会思想史（19世紀中葉ロシアの世論、スラヴ問題）

柏木 雄介（2013年10月15日入会）

所属：早稲田大学大学院文学研究科西洋史コース修士課程

専攻：ソヴィエト史（初期及びスターリン期民族問題）、近代・近現代ベラルーシ史（19世紀末から20世紀初頭の民族運動）

磯貝 真澄（2013年11月15日入会）

所属：京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員

専攻：19世紀後半～20世紀初頭、ロシア帝国・ソ連のヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム社会の歴史

鳥飼 将雅（2013年11月16日入会）

所属：東京大学法学部

専攻：戦後スターリン時代の政治史

【新委員会の発足】

＜新委員長 挨拶＞

土屋好古

豊川さんから委員長を引き継ぎました。次の若い世代に諸先輩方が築いてきた財産を受け継いでいくことが使命だと思っています。任期中に幕張での中東欧研究世界大会があり、また任期のあとには2017年のロシア革命百年が控えています。後者については、もし何か大きな企画を立てるのであれば、私たちの任期のうちに検討を始めなければならないかもしれません。会員の皆様のご協力が必要です。どうかよろしく願いいたします。

＜新委員の構成＞（紙面の都合で配置しているため、順不同）

※一般公開のために、連絡先の部分を削除編集しました（2018年10月13日）。

氏名（委員会のなかでの担当係）

- (1) 所属
- (2) 連絡先
- (3) 専門分野
- (4) 委員になったの抱負
- (5) 各担当における連絡事項

伊賀上 菜穂（名簿担当）

- (1) 中央大学総合政策学部
- (2)
- (3) 古儀式派の動向、シベリアの民族関係、旧満洲におけるロシア系移民
- (4) 2度目の委員に選出されました。他の委員の方々と協力して会の活動を支えていきたいと思っております。

金山 浩司（ニューズレター）

- (1) 東京工業大学
- (2)
- (3) スターリン期の科学史（とくに物理学史）
- (4) 新参者で、わからないことだらけ（あるいは、わかっていることがほとんどない）です。ご教示・ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願いいたします。

日臺 健雄（編集）

- (1) 埼玉学園大学経済経営学部
- (2)
- (3) ソ連経済史(1930年代後期のコルホーズ農民史)、現代ロシア政治経済
- (4) 新任の委員であり不慣れな点も多いのですが、会員の皆様のお役に立てるよう精一杯努力いたします。

新井 正紀（名簿担当）

- (1) 国立公文書館
- (2)
- (3) ソ連邦文化政策史
- (4) 新しく委員会に参加させていただきます。会の運営のお役に立てるよう、できる限り努力いたします。

河本 和子（例会）

- (1) なし
- (2)
- (3) フルシチョフ期の国家と社会
- (4) 微力を尽くします。
- (5) 報告者を募集しています。お気軽にどうぞ。

巽 由樹子（会計）

- (1) 東京外国語大学
- (2)
- (3) 近代ロシア出版史
- (4) まだ業務に慣れませんが、がんばって覚えます。
- (5) 会費の納入をお願いいたします。

中嶋 毅（編集）

- (1) 首都大学東京
- (2) ロシア近現代史・在外ロシア史
- (3) 雑誌発行を絶やさぬよう努力します。
- (4) 皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

村知 稔三（例会）

- (1) 青山学院女子短大
- (2)
- (3) ロシア保育史・子ども史
- (4) 前期は委員になってすぐにサバティカルを迎え、ご迷惑をおかけしました。今期はどこにも出る予定がないので、できるだけ皆様のお役に立てたらと思っています。

土屋 好古（委員長）

- (1) 日本大学文理学部
- (2)
- (3) ロシア労働運動史、第一次革命史

小森 宏美（事務局）

- (1) 早稲田大学教育・総合科学学術院
- (2)
- (3) エストニア現代史
- (4) 「中継ぎ」として頑張ります。

立石 洋子（ニューズレター）

- (1) 日本学術振興会
- (2)
- (3) ソ連・現代ロシアの歴史認識と政治
- (4) 発行が遅れないように努力します。よろしくお願ひいたします。
- (5) ニューズレターに掲載したい記事やご意見がありましたらお送りください。

松村 岳志（会計）

- (1) 大東文化大学経済学部
- (2)
- (3) デカブリストは 2.26 事件の夢を見るか？

豊川 浩一（例会）

- (1) 明治大学・文学
- (2)
- (3) 近世ロシア史
- (4) 例会を盛り上げていきたいと思ひます。会員皆さまのご協力をお願ひします。

松戸 清裕（編集）

- (1) 北海学園大学法学部
- (2)
- (3) ソ連史
- (4) 特にありません。
- (5) 特にありません。

畠山 禎（編集）

- (1) 北里大学・一般教育部
- (2)
- (3) 帝政末期ロシアの社会史
- (4) 今回初めて委員になりました。よい雑誌になるよう努力したいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

【編集部から－投稿規定・執筆要領の変更について】

編集部では、注記載の変更に伴う字数の自然増などを考慮して、2014 年秋発行予定の 95 号から新たな投稿規定・執筆要領を適用することにしました。ここでは、『ロシア史研究』奥付上に記載されている投稿規定・執筆要領について、変更部分だけ記します。規定枚数を増やすかわりに、従来編集部裁量で認めていた超過をなくして、原稿分量の厳格化をはかりました。95 号に投稿ご希望の方はご留意いただき、この新规定に従って投稿下さるようお願いいたします。なお、変更のない部分も含めた新规定の全文は 94 号に掲載します。

現投稿規定の 2 行目から 3 行目を以下のように改定

論文は 400 字詰め原稿用紙で 80 枚以内、研究ノート等は 40 枚以内、書評は 20 枚以内、新刊紹介は 1100 字以内とする。いずれも、図表等を含めて規定枚数は厳守のこと。

現執筆要領の第 2 項に以下を新たに挿入

ワープロソフトは、1 ページ 40 字 x 30 行（400 字詰め原稿 3 枚換算）に設定すること。ソフトによっては、文末注の行間が狭くなるが、本文と同じ文字ポイント・行間に設定すること。それができない場合は文末注の行数を明記すること。

執筆要領の末尾「投稿は随時受理します」を次のように改定

投稿は随時受理する。11 月発行予定の奇数号の締め切りは 6 月 10 日、5 月発行予定の偶数号の締め切りは 12 月 10 日とする。

なお 95 号以降の投稿に関するお問い合わせは、以下をお願いします。

〒192-0397 八王子市南大沢 1-1 首都大学東京大学院人文科学研究科
中嶋毅研究室（気付） email: nakash(at)tmu.ac.jp
※(at)は@に置換

【2014年のロシア史研究会大会】

2014年大会は10月18日・19日の両日、日本大学文理学部を会場として開催される予定です。会員の皆さんの報告希望などを募集します。共通論題の提案については近年会員からの提案がほとんどなく、アンケートを待って検討を始めると報告者への依頼などが遅れることから、今期は委員会で先行して議論することにしてあります。できれば3月末までに共通論題とその報告者を決定したいと考えていますので、自由論題・パネルの希望とは別に回答期日を定めさせていただきました。ご了解の上、積極的なご意見・ご希望・ご提案をお寄せくださいますよう、お願いいたします。

共通論題：提案締切 3月9日（日）

自由論題・パネル報告希望：応募締切 5月5日（月）

（自由論題「題目、梗概（A4一枚以内）」、パネル「題目、参加者・所属、梗概（A4一枚以内）」）

<応募先>

ロシア史研究会事務局

E-mail: [tulbi5386\(at\)gmail.com](mailto:tulbi5386@gmail.com) ※(at)は@に置換

Address: 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 早稲田大学 教育・総合科学学術院
小森研究室 ロシア史研究会事務局

【ICCEES 幕張大会のプロポーザル受付開始について】

2015年8月3日から8月8日まで、幕張にてICCEESの世界大会が開催されます。

ICCEES（イクシーズ; International Council for Central and East European Studies; 中欧・東欧研究国際協議会）は、1974年に創設された、世界各国の旧ソ連・東欧地域研究学会の連絡組織です。現在、正規加盟が17か国20団体、準加盟が4か国7団体あり、日本からも、本学会を含む6団体の構成するJCREES（ジェイクリーズ; The Japan Council of Russian and East European Studies; 日本ロシア・東欧研究連絡協議会）が、代表機関としてICCEESに正規加盟しています。

ICCEESは5年に1度世界大会を開催しますが、開催地はほぼヨーロッパに限られていました。今回の幕張での大会は、欧米外で開催される初めての世界大会となります。この世界大会はきわめて大規模なもので、前回のストックホルム大会には、59か国から1247人（うち日本からは61人）が参加しました。今回は初めてのアジアでの開催ということで、従来の欧米からの参加者に加えて、アジア諸国、中央アジア諸国などからも新しい参加者が増加することが期待されています。ICCEES世界大会は、中欧・東欧から旧ソ連全域を対象とし、学問分野においても、政治・経済・歴史・文化・言語など、幅広い分野を包括しており、世界中の中欧・東欧・ロシア・ユーラシア関係の学術研究者にとっての巨大な開かれたフォーラムです。世界の最前線の研究者たちと議論をする絶好の機会ですので、是非とも積極的にご参加くださいますよう、お願いいたします。

開催自体は2015年8月ですが、大規模な学会を組織する都合上、申し込み（プロポーザルの提出）がすでに始まっており、締め切りは2014年5月末日となります。申し込みサイトは以下になります。

<https://c-linkage.com/iccees2015/>

手順は、まず、ご自身の情報を入力することでアカウントを作成し、次に必要な情報を入力した後、情報がすべて揃ったら送信ボタンを押して申請を終了させます。詳しい入力方法は、以下に動画がありますのでご参照ください。

<https://c-linkage.com/iccees2015/demo/>

参加方法には、①個人、②パネル、③ラウンドテーブルの三つがあります。

②のパネル形式（報告者3名（4名も可）、ディスカッサント（2名も可）、司会者）での申し込みが基本となります。③のラウンドテーブル形式をとる場合は、司会者1名に対して、4～5名の報告者を単位とします。②③の場合、すべてのメンバーを一つの国から選出することはでき

ません。(つまり、全員日本人でパネルやラウンドテーブルを組むことはできません。ただし、この場合の「国」とは、在住国ではなく、国籍を基準とします。)

パネルやラウンドテーブルを組まない場合は、個人で申し込むことも可能です。この場合は、組織委員会が他の個人参加者と併せて、パネルを組むこととなります。そのため、テーマが拡散しがちになる嫌いがあります。したがって、自らパネルを組む方が、統一的なテーマをもった魅力的なパネルを提示することができるということになります。まずはパネルの作成をご検討ください。

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/text/GuidelineforProposals2PRHLDouble.pdf>

プロポーザルの提出期間が終わったら、組織委員会のもとに置かれるプログラム委員会で審査を行い、プログラムを決定いたします。その後、2014年9月から、参加登録(参加費の払い込み)が始まります。参加費は、下記のとおりです。参加費用は安価とは言えませんが、大規模な国際学会を運営するためにはやむを得ない標準的な金額だと思われます。早めの登録によるディスカウントや退職された方や院生などに対するディスカウントも設定されています。ご理解をいただければ幸いに存じます。

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/text/MakuhariCongressRegistrationFeesPRHLDouble.pdf>

幕張大会では、1人でも多くの会員のみなさまに発表していただくことが、日本のロシア史学の学術レベルの上昇と国際化に繋がっていくと思います。日本の学術レベルの高さを世界にアピールする大きなチャンスでもあると思います。若手の研究者からベテランの研究者まで、是非、前向きに参加をご検討ください。

なお、発表するロシア史研究会の若手B会員には、後日一部返還のような形で参加費の補助がなされる予定です。

ICCEES 幕張大会・英語版ホームページ(日本語版も近日開設予定)

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/>

facebookでも「Iccees Congress 2015, Makuhari, Japan」のアカウントで情報を提供しています。何かご不明な点がございましたら、いつでも下記の組織委員までお問い合わせください。

幕張大会組織委員 池田嘉郎、青島陽子

Call for Proposals for the Ninth ICCEES World Congress to Be Held in Makuhari, Japan, on August 3-8, 2015

Panel, paper, and roundtable proposals for this congress are being accepted at <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html> The deadline for submissions is May 31, 2014.

The International Council for Central and East European Studies (ICCEES) is the global alliance of national associations of Slavic and Eurasian studies, composed of the ASEES (United States), CAS (Canada), BASEES (Britain), DGO (Germany), FAREES (Finland), ANZSA (Australia), CAREECAS (China), JCREES (Japan), KASS (Korea), and MACEES (Mongolia), and other respectable organizations. The ICCEES was created in 1974 and holds a world congress once every five years. The next world congress will be held in Makuhari (30 minutes from the heart of Tokyo), Japan, on August 3-8, 2015. The official languages of the congress are English, Russian, French, and German.

For too long, our scholarly community had been developing in relative isolation from each other. Most active international exchanges would seem to have been taking place among North Atlantic countries or between North Atlantic and former communist countries. This is the background against which all previous ICCEES world congresses were held in North America and Europe. More than twenty years have passed since the end of the Cold War, during which

Euro-Atlantic perspectives of the Soviet Union and Eastern Europe indeed dominated. It is now time to create a real global agora on Slavic and Eurasian studies, in which scholars become familiar with diverse perspectives of the Slavic Eurasian region from East and South Asia (China, Japan, Korea, Mongolia, India, etc.), the Near East (Turkey, Iran, Syria, etc.), and Latin America. To achieve this, East Asian Slavic associations (CAREECAS, JCREES, KASS, and MACEES) have held an annual East Asian conference on Slavic Eurasian studies since 2009 (2009 in Sapporo, 2010 in Seoul, 2011 in Beijing, 2012 in Kolkata, and 2013 in Osaka). This annual conference began to unexpectedly attract many participants from North America, Europe, and the former socialist countries because it enables participants to become acquainted with unfamiliar national scholarly traditions that are barely touched upon at conferences in North America and Europe.

To further promote encounters with diverse scholarly perspectives on the Slavic Eurasian region, the ICCEES decided to hold the next World Congress for the first time outside Europe and North America, in Japan, Makuhari. The Organizing Committee of this Congress is working hard to make Makuhari a place “where many Wests meet many Easts.” Makuhari is an ideal location for international events. It takes only 30 minutes by bus from both Narita and Haneda International Airports, and also just 30 minutes by train from downtown Tokyo (Tokyo Railway Station). Though this might be unexpected for foreign colleagues, in Japan hotels and restaurants are much cheaper than in Europe and the United States (see: <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/accommodation.html>). You may enjoy Japan after or before the congress; it takes only two hours to go from Tokyo Station to Kyoto by New Express Train.

Send all queries to iccees2015@slav.hokudai.ac.jp and network via <https://facebook.com/iccees2015>

Organizing Committee of the Ninth ICCEES World Congress
Co-Chairmen: Professor Nobuo Shimotomai of Hosei University,
Professor Mitsuyoshi Numano of Tokyo University
Vice-chairman: Professor Kumiko Haba of Aoyama Gakuin University
General Secretary: Professor Kimitaka Matsuzato of Hokkaido University

ロシア史研ニューズレター
第92号 2014年1月16日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(立石洋子、金山浩司、青島陽子)
〒169-8050
東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学 教育・総合科学学術院
小森宏美研究室気付
